

<研究ノート>

## 「呪術」をめぐる覚え書き

春日 直樹\*

### 要旨

人類学で「呪術」と称されてきたものを、アブダクションの視点から提示し直す。ここでいうアブダクションとは、部分集合と全体集合の間に対称性を認めて、その帰結として矛盾律の破れを導出する論理である。この論理は比喩と同じ形式をとるために、人類学者は呪術を比喩として理解する傾向が強かった。だが呪術は、人々に不可視の領域を呼び出し「何でもあり得る」現実を作出しながら、その現実にあふさわしく諸事諸物の関係性を高い自由度で再編成する。それは「仮想」と「現実」をアブダクションによって必然的に結びつける操作なのである。

**キーワード：** 呪術、アブダクション、集合、対称性、矛盾律、パプアニューギニア、マッシュム

### 目次

- I アブダクション・対称性・矛盾律
  - 1 「PならばQ」にして「QならばP」
  - 2 アブダクションの構造
  - 3 集合論としてのアブダクション
- II アブダクションとしての呪術
  - 1 比喩とアブダクション、仮想と現実
  - 2 「霊」について
  - 3 「何でもあり得る」現実
- III 可視なるもの、不可視なるもの
  - 1 呪術と出自集団の論理的な同一性
  - 2 不可視なるものを推論する不確かさ
- IV 結び

---

\* 一橋大学大学院社会学研究科特任教授

本稿は「呪術」と称されてきたものをあらたな視点から理解する試論である。未開の科学、信念に即する合理、象徴表現、行為遂行性、別種の存在論の証左といったこれまでの研究のいずれの論点に対しても異を唱えるものではない。理由はいかなる議論とも際だった背反性を帰結しないことにあり、さらには形式張った序論で自説を飾る論文ではなく、論点を確認する覚え書きのかたちをとるためである。人間の思考様式を、無意識や無限を含む広い射程でテーマ化する一里塚として、これを記す。

## I アブダクション・対称性・矛盾律

### 1 「PならばQ」にして「QならばP」

ある実物をみせられて当の実物を描写したカードを選択するように反復訓練を受けた人間の幼児とチンパンジーは、カードから実物を選択するという逆向きの行為に関しては正反対の反応を示す。チンパンジーには再度の反復訓練が必要だが、人間の幼児は学習なしでカードから実物を選択する [Kojima 1984; Dugdale and Lowe 2000; 友永 2008]。この能力は「もし～ならば」(if-then)の規則でいえば非論理的な認知バイアスであり、心理学では命題 P と逆命題 Q を対称的に関係づける思考としてテーマ化されている。認知バイアスがどういった条件下で稼働するのかについて、さまざまなモデルの提起と実験がおこなわれてきた [Sidman and Taiby 1982; Takahashi, Nakano and Shinohara 2009]。これらの議論は認知バイアスが推論としての合理性をいかに有するのかというかたちをとるが、本稿はまず論理の水準で対称性の検討をおこない、次にこの論理が必然化する場として呪術を提示するという手順を踏む。

「もし P ならば Q である」が成り立つと「もし Q ならば P である」が成り立ち、反対に「もし Q ならば P である」が成り立つと「もし P ならば Q である」が成り立つ状況は、一つの論理記号によってあらわすことはできない。かりに「 $P \Leftrightarrow Q$ 」ないし「 $Q \Leftrightarrow P$ 」と書けば、実質等値をあらわして合同「 $P \equiv Q$ 」になってしまう。ならば P と Q の間の対称性は、人間にどのような思考として出現するのか。

因果関係の認知と論理の形成がいかに結びつくかについて認知科学はいまだに解明できていないが、とりあえずはこの両者を念頭に置いて思考の内容を特定してみよう。まずは時間の経過を前提にする場合、つづいて時間の要素を抜き取る場合において、以下に提示する。「もし P [または Q] ならば Q [または P] である」という関係はそれぞれに、

- (1) P [Q] が原因となり、Q [P] は結果となる。つまり、「P [Q] が起こると Q [P] が生じる」という因果律に等しい。
- (2) P [Q] を前提として、Q [P] という結論を導く。つまり、「P [Q] は Q [P] である」という真偽を断定する文に等しい。

P と Q に対称性が成り立っており、「もし P ならば Q である」かつ「もし Q ならば P であ

る」がともに妥当となる場合には、次の思考を帰結するだろう。

- (1) 原因から結果を予測できるように、結果から原因が遡及できる（原因と結果を転倒させる逆因果ではなく、予測と遡及が同じ思考様式で成り立つ、という意味である）。
- (2) ある前提から真なる結論を導いて、その真なる結論を前提に立てると、今度はもとの前提が真なる結論になる。

## 2 アブダクションの構造

因果律にせよ真偽の断定文にせよ、二つの構成要素が対称的に配置できるかぎりではチャールズ・S・パースのいう「アブダクション」の類型に相当する。人類学でアブダクションといえば、ベイトソンが思考のダイナミズムそのものとして提示したときのように、曖昧な規定のままに分析の締めとして登場する傾向があり、近年ではS・グリーンウッドの『呪術の人類学』をその典型として上げることができる [ベイトソン 1982: 195-197; Greenwood 2009: 151-157]。アブダクションを有効に活用するには、暫定的であれ明確な規定をしておくのが望ましい。パース自身の初期の議論にならい、アブダクションを演繹や帰納に対比させながら、次のような三段論法として定義しよう [Peirce 1960] <sup>1</sup>。

| 演繹     | アブダクション | 帰納     |
|--------|---------|--------|
| SはMである | SはMである  | MはSである |
| MはRである | RはMである  | MはRである |
| SはRである | SはRである  | SはRである |

因果律と真偽の断定文は、演繹とアブダクションでは以下のように例示できる。

| 演繹                         | アブダクション               |
|----------------------------|-----------------------|
| 「田舎道で馬車に乗ると、泥のハネが飛ぶ」       | 「田舎道で馬車に乗ると、泥のハネが飛ぶ」  |
| 「ハネが飛ぶと、服の袖に付着しやすい」        | 「あなたの服の袖に、泥のハネがついている」 |
| 「田舎道で馬車に乗ると、服の袖にハネが付着しやすい」 | 「あなたは、田舎道を馬車に乗って来た」   |
| *                          | *                     |
| 「彼は私に親切である」                | 「彼は私に親切である」           |
| 「私に親切なひとはよい人間かもしれない」       | 「よい人間は親切である」          |
| 「彼はよい人間かもしれない」             | 「彼はよい人間である」           |

<sup>1</sup> この整理は、パースによるアブダクションと三段論法の一般形態および帰納法との比較 [Peirce 1960: 299-312]、そして「規則」「事例」「帰結」の三要素をもちいたアブダクションと演繹、帰納との比較にもとづく [372-374]。ただし、ここでのパースは「アブダクション」を「仮説」と称している。

### 3 集合論としてのアブダクション

アブダクションについてパースがいかに考察を進展させたかを整理するのは至難の業だが、論理代数や集合論へと向かったことは確認できる [Anellis 2012; Dipert 1995]。そこでアブダクションを、集合の観点から論じてみよう（本稿では立ち入らないが、無限や無意識の議論への布石でもある）。本来であれば、「PならばQである」あるいは「PはQである」が成り立つかぎり、「集合  $P \subseteq$  集合 Q」の関係が成り立たなければならない。因果律の例でいえば、集合「泥のハネが飛ぶ」には集合「田舎道で馬車に乗る」が網羅されており、たとえば集合「自動車道路を歩く」とか集合「工事現場を通る」とともに部分集合を形成している。真偽の断定文を例にとれば、集合「よい人間」には集合「誠意のあるひと」や集合「嘘をつかないひと」がやはり部分集合として含まれる、という具合である。

アブダクティブな因果律および真偽の断定においては、全体集合と部分集合の間に対称性が成り立つ。つまり「QならばPである」あるいは「QはPである」も成立するために、上記の「集合  $P \subseteq$  集合 Q」に加えて「集合  $P \supseteq$  集合 Q」が成り立つことになる。集合論に依拠するかぎり、考えられるのは「集合  $P =$  集合 Q」をおいて他にないのだが、上の例でみたようにPとQをいかように想定しても同値にはならない。要するに、アブダクションではPとQは異なるままに、たがいに自分を相手の部分集合として関係づけるのである。

このことは論理としての重要な特徴を含意する。「PはQの部分集合である」にもかかわらず「PはQの全体集合である」わけだが、「全体集合は部分集合でない」かぎり「PはQの部分集合でない」が成り立ってしまう。そうすると、「PはQの部分集合である」にして「PはQの部分集合でない」という帰結になるので、論理にとって不可欠な約束である「矛盾律 ( $\sim (P \wedge \sim P)$ )」が破れてしまう。アブダクションは全体集合と部分集合の間に対称性を成り立たせる論理であると同時に、この対称性によって矛盾律の破れを導出するのである。

## II アブダクションとしての呪術

### 1 比喩とアブダクション、仮想と現実

実物とカードの関係から対称性の議論を出発させたので、記号表現と記号内容の間に本当に対称性が成り立つのかを論じたいところだが容易ではない。言語習得の過程は、実物からカードを教えられてカードから実物に反応して褒められる——何らかの報酬を得る——という繰り返しかも知れない。双方向の変換が集団内で保証されるかぎりでは、記号表現と記号内容の間で対称性が成り立つといえよう。しかし、人間がつくりだしその一部でありつづける諸環境は、記号による表現をそのまま内容として現前させるわけではない。言語の習得を支える構造は、物理則との齟齬という問題に出会うだろう（呪術はその問題に対処する一様式とみなすことができる）。

まずは社会科学に流通する語りに準じて、一定の人々が共有する記号に関しての使用法が、規定集として本にまとめられている状態を想定しよう。記号表現と記号内容の間に特定の関係が約束されているとすれば、その関係を逸脱する記号の使い方は誤用か、さもなければ新種の比喩ということになる。

ここで重要なのは、比喩がアブダクションと同じ構成をとる点である。

SはMである  
RはMである  
[∴] SはRである

両者は「SとRはともにMである」の構造を共有する。ただし、比喩では「SはRのようだ」という水準に置かれて断言を留保しており、アブダクションがRとSの関係を現実態として記述するのに対して、同じ関係を非現実態つまり仮想として記述する。比喩とアブダクションは同じ構成をとる点で類似するが、記述の性格においては相反する。両者の相反性は、「現実」と「非現実」の区分に依拠している。

ここでようやく呪術が登場する。人類学で「呪術」として論じられてきた幾多の行為は、調査者には「非現実」の記述と思える行為が当事者たちによって「現実」の記述として実践されることで一つのテーマとなり、議論の対象になったと思われるのである。人類学者が比喩として理解するこの対象は、当事者たちにとってのアブダクションである可能性がある。

アブダクションにはすでにみたとおり、二つの論理的な特徴がある。(a)異なる二つの集合は、互いに相手の部分集合かつ全体集合として関係しあう。(b)「Xであり非Xであることはありえない」という矛盾律は崩れており、「Xでなければ非Xである」という排中律も成り立たない。こうした(a)(b)が強力に作動するために、論理の縛りはかなり緩むことになる。アブダクションの有効な領域では、成立の不可能な関係が全体として激減するに違いない。つまりそこでは、当事者にとっては「何でもあり得る」という様相が強く、しかも人類学者にとっては「非現実」と思えるような状況が作りだされているはずである。

「何でもあり得る」ような「現実」は、人類学者の同僚の哲学者によれば「潜在的」と形容できるが、当事者たちにとっては「霊」の深く関与する状況であり、最近まで〈超自然〉と言われた領域に相当する。本稿はこのお馴染みのテーマを再検討するために、パプアニューギニアおよびマッシムの民族誌に依拠して「霊」の素描をまず提示する<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> 中川理は「どうとでもありえる世界」という類似のテーマで論考をものしている[中川 2011]。

## 2 「霊」について

ここでいう「霊」とは英文の民族誌に *spirit* として描かれ、相当する現地語が付されている観念である。霊の世界がいかなるものかは、死なないかぎり誰にもわからない。霊そのものをみることはできないのだが、霊の表れ、ないし霊に起因する事象は経験することができる。夢、半意識的な夢想や空想、影、水や鏡の反射、幻視のような不確かな像がそれに相当する。いずれも、みえはするが実在の不確かな対象である。

霊には独自の意志や感情があり、生者の前に可視的な事象を生起させる。生者には父方、母方、もしくは双方に由来する霊が授けられており、祖先の霊からの干渉をしばしば受ける。生者の霊は身体を住处とするが、睡眠中や昏睡状態や意識の極限——成人式などの——では身体から遊離して、他の霊たちとの交流を経験する。生者の霊は死後に適切に吊われるかぎりで祖霊となり、そうでなければ森を浮浪する幽霊となって通りかかる生者に悪さをはたらく。生者の中には生得的な能力、かつ節制と修行をつうじて霊との交流にひいでた者たちがいる。霊たちがどこでなにをしてなにを言い合っているのかを彼らが語り、まわりの生者たちが固唾を吞んで耳を傾けたり、冗談で応えたりする様子は、民族誌に登場するところである。しかしながら、霊の真意はどのつまりは不確かである。

生者である「私」にとって、私の霊は可視的な世界とは別の世界の原理に従いながら、私の身体や意識やまわりの人々に直接の影響を及ぼし、さらには農耕・狩猟・儀礼などの諸活動の成否にかかわることで強い影響を与える。私の霊が私の身体を離れて別の場所で霊たちと出会うことはすでに述べたが、霊は私本来の意志とは違う意志を私に抱かせたり、意志に反する行為を惹起させたりする。「隠れた自己」と表現する人類学者がいてもおかしくはない [Stephen 1989]。私のみた夢を私が検討しても、私の霊の行為はたかだが私の意識に映し出されているにすぎない。

## 3 「何でもあり得る」現実

要するに、生者にとって観察可能な世界は現実のほんの一部でしかない。彼らは不可視な霊の世界から決定的な関与をつねに受ける状態に置かれていて、霊の放浪、変身、攻撃、饗宴、性的享楽など目のくらむ諸行為の影響にさらされている。ものごとは可視の人物・事物・動植物の間の諸関係として構築されるだけではなく、霊たちとそのまわりの諸物という不可視な要素がさまざまに編成をつづけていく帰結としても生成変化を遂げるのである。いまのこの状態がいつどのように変貌するのかは、予断を許さない。とくに見通しのきかない森、日没後の戸外、霧の垂れ込めた海では、不可視な世界を間近に感じる人々が、何があってもおかしくない状況に放り込まれて不安におののく。

呪術とはまさに、このように「何でもあり得る」現実を積極的に現前させる企てである。一般には災いが問題化するとき、あるいはことの成就や成功を祈願するときにおこなわれるが、単に目的・手段と直接にかかわる要素を登場させるのではなく、不可視世界を彷彿さ

せる行為を遂行して、その世界へと節合する緊張や興奮を際だって高める。「何でもあり得る」現実のきわみの演出は、アブダクションの稼働にふさわしい状態の作出でもある。全体集合と部分集合の対称性が成立して、矛盾律が効力を失うアブダクションでは、全体が部分を、部分が全体を導出するし、非現実を表現することは現実を表現することでもあるような状況を開く。

邪術を例にして、この点を確認しよう。殺す相手の食べ残し、毛髪、所持品は彼の一部分でありながら、彼自身つまり犠牲者の全体として呪いの対象となる。同時に犠牲者は、食べ残しや毛髪や所持品に起こる変換が必然的にみずからの変換を含意するという点ではこれらの一部分を構成している。さらに食べ残し、毛髪、所持品に致命的な打撃を与える言行は、殺しの表現であるかぎり「非現実」だが、殺しを導出する点では殺しという「現実」そのものである。

呪術の本領である「現実」「非現実」の特有な関係については、とくにアブダクションの定義に即して（1）真偽の断定文（2）因果律としての構造を確定することが望ましい。そこで {S is M. R is M. ∴ S is R.} の S、R、M を次のようにとってみよう。

- S : ～を殺す表現をする
- R : ～を殺す
- M : ～の死に関わる

以下の断定文は真である。

「～を殺す表現をする」は「～を殺す」である。

S と R の内容を入れ替えるならば、次も真となる。

「～を殺す」は「～を殺す表現をする」である。

同様にして因果律でみると、以下の二つがともに成り立つ。

「～を殺す表現をする」が「～を殺す」を惹起する。

「～を殺す」という結果は「～を殺す表現をする」によって生じる。

かりに、表現と実世界は記号と行為のように水準が違うとの異論を唱えても、すぐに退けられてしまう。{ S is M. R is M. ∴ S is R. } という構造に矛盾律の破れ {P is non-P} を適用するならば、「記号の水準は非記号の水準である。行為の水準は非記号の水準である」

となって、「記号の水準は行為の水準である」を導出できるのである。

### Ⅲ 可視なるもの、不可視なるもの

#### 1 呪術と出自集団の論理的な相同性

呪術を構成する論理の中核は、以上で示すことができた。換喩のみならず隠喩をも網羅する点を、強調しなければならない（ただし、民族誌で検討する隠喩の多くは直喩的であり、前衛詩のような際だった隠喩性に乏しい）。

本稿はこの先、結びに向けて二つの節を設ける。まずは、呪術の論理的な特徴が社会的な水準で成り立っており、いわば論理の対応的な環境が整っている点を本節で指摘したい。つづいて次節では、社会的水準を構成する出自の原理が可視・不可視という二つの領域に依拠することを検討し、不可視性と「霊」ならびに呪術の関係をあらためて論じる。

パプアニューギニアおよびマッシュムでは、いわゆる外婚単位に相当する出自集団が呪術と深くかかわっている。出自集団といっても、創設者の名前は忘れられて、系譜は4代まで遡ることができれば上出来であり、血族でない成員も少なからず含まれている。それでもなお、出自の原理はスピーチや行為で重視されており、サンクションとして確実に機能する。成員の災いは祖霊の怒りや嫉妬が引き起こした可能性が高いし、成員の成功には祖霊の理解や助力が不可欠である。前者では治療や回復のために、後者では祈願や感謝の意を表す呪術が何らかのかたちで求められる。もしも祖霊を原因としない病気や死と判断する場合には、他集団の誰かによる邪術と考えるのが普通である。婚入した女性、彼女の姻戚、あるいは縁組と無縁な敵対的もしくは遠方の集団の成員が、呪術をかけたに違いない。

出自集団の成員は別の出自集団の異性と結婚をして子どもをつくり、どちらかの集団の子孫として残すとともに、自分が死を迎えると自集団および配偶者の集団の成員たちによって弔われて、自集団の祖霊となり祖先となる。呪術で確認した二つの論理的な特徴、つまり (a) 部分集合と全体集合との対称性、および (b) 矛盾律の破れと排中律の不成立は、出自集団の次元で認められることを指摘しなければならない。

出自集団という集合は、死者である祖先と生者としての子孫によって構成されており、この集団と実際に活動する生者とは全体集合と部分集合の関係にある。ところが、活動中の成員たちが集団すべての名誉や権利を体現しているかぎりでは彼らは集団を包摂することになり、全体-部分の関係が逆転する。ここから導かれる矛盾律と排中律の破れは、ストラザーン夫妻によるハーゲン高地での身体装飾の写真集にドラスチックに例示されている。大規模な贈与儀礼であるモカ (moka) の盛り上がりにおいてビッグマンたちが登場すると、観衆は「霊が来る！」と叫ぶ [Strathern and Strathern 1971: 126]。ビッグマンは出自集団の代表者であり、子孫とともに先祖を体現する。彼は生者であると同時に死者であり、「生



者かつ非生者（＝死者）はありえない」という矛盾律、および「生者でなければ死者である」という排中律をともに破っている。

こうして、出自集団は呪術に対応する論理的な特徴を有しており、呪術にふさわしい環境を構成することがわかる。

## 2 不可視なるものを推論する不確かさ

けれども、出自集団そのものは「生者でなければ死者である」という排中律にもとづいて、生者たちと死者たちとの和集合として成り立つ。加えて、死者の霊が生者の霊にまさるように、死者の生者に対する優位を基本原理として据えている。つまり出自集団は、生者と死者にかかわる矛盾律を厳守し、かつ対称性でなく優位性を確保するところに存立するのである。このことは、「生（者）から死（者）へ」という不可逆性が、疑うべからざる厳格な前提として人々に受け入れられていることを示唆する。

「生（者）から死（者）へ」の変化は、可視の領域から不可視の領域への転換でもある。この変化と転換はいうまでもなく、生者による観察と推論に依拠する。二つの領域の設定と非対称な関係は、生物学的な合理とみなすことができる。捕食行為の主体・客体のどちら側に立つにせよ、相手にみえないように相手を見ることは優位であり、その関係が逆転すると自分が劣位に置かれてしまう。したがって、みえるものの背後にはみえないものがある、と配慮することは配慮しないことよりも望ましい。みえないものはいつでも想定が可能なので、みえないものへの配慮は生活における必須要件である、という主張をしりぞけるのも至難である。生者と死者によって生活が構成されるかぎり、不可視の死者の優位、および彼らへの気配りと対処が求められる。

可視と不可視の関係について、コミュニケーションの観点からいわば自然主義的に見直してみよう。発達心理学者のトマセロは、他の霊長類とくらべて人間がコミュニケーションの相手の視点を獲得する能力にすぐれており、この特性を発揮して記号行為を発達させた点を実証している [トマセロ 2006, 2013]。人間の記号行為は発信者と受信者が同じ視点を共有することに依拠し、言語もこの視点依存性の上に成り立つ。指さし、身振り、手振り、表情から相手がなにを意図しているのかを読みとることは、いわゆる「相手の立場」を察知することでもある。みえるものをつうじてみえない何かを推測するこの段階ですでにアブダクションが働いていると考えれば、本稿の冒頭に引用した実物とカードをもちいた実験でも、提示された可視の対象から不可視の被指示物がすでに想起されていたのかもしれない。「待っていました」とばかりに、幼児が実物を指さした可能性がある。

可視なものから不可視なものへの推論は、結果としてそれ自体の対称性を形成していく。不可視から可視への推論である。ただしこの場合は、全体集合・部分集合の相互変換のような正真正銘の対称性ではなく、アナロジーという非対称的な比喻に依拠するかぎりでは対称性を成立させるにすぎない。すなわち、自分にみえていなかった相手の視点がみえるもの

へと変換したように、本来みえないものがみえるもののように変化する、という類比である。そこにはみえないものの真珠貝、贈与の儀礼といった既視の対象を手始めとして、想像力を働かせた未来・空想の事物や事象を含むのはいうまでもない。こうした通例の言語機能に加えて、既視のものに不可視性が喚起される状態に注目しなければならない。

たとえば、乾季に姿を消すヒクイドリ、理解できない言語を話す姻戚、不思議な光沢の貝や羽根、異様に丸みを帯びた白い石…、と次々に多種多様な事例を上げることができるが、すべてⅡ章2項で羅列した「みえはするが実在の不確かな対象」に準じるものであり、良きにつけ悪しきにつけ「霊」にかかわる。「霊」は不可視なものの極限として、この種類のみえるものに決定的な不確かさを賦与すると同時に、みえないものをみえるものへと変える操作を、つまりは不可視から可視への推論を、あくまでアナロジーにすぎないのだと知らしめる。

「霊」の不可視性にもっとも深くかかわる実在とは、なんといっても身体としてあって自分の意志や思考をも有する「私」という生者であろう<sup>3</sup>。ここの「私」、そこの「私」、あそこの「私」、これら「私」たちの織りなす集合的生活にとって、「私」をめぐる不可視性はもっとも用心深く扱うべき主題である。近代西洋風に「心」を想定して「理解」という曖昧な目標を据えるなど、話にならない対処法であろう<sup>4</sup>。パプアニューギニアとマッシュムの人々は、可視の外観によって不可視な内面を推論できるように、外観への気配りを際立たせるという道を選ぶ。毛髪や肌のケア、身体装飾、そして相手への贈与である。呪術はこうした企ての成功を祈願するだけではなく、相手を惹きつけたり出し抜くためにおこなわれる。「私」をめぐる不可視性は、「何でもあり得る」現実をテーマ化せざるをえないのである。

誤解のないように付け加えると、不可視なるものの推論はつねに不確実性を残すが、それによって呪術の正しさが消えるわけではない。たとえば、呪術師が霊を呼び出し霊と語っていることは疑いえないが、霊の語りについては多様な解釈が可能なのである。正しいはずの呪術が効力を発揮しない場合には、呪術師に不手際があるか、対抗呪術が働いているか、呪物の力が衰えているかなど、まさに多様な解釈が提起される。

#### IV 結び

「呪術」と称されてきたものは、「何でもあり得る」現実を際だせると同時に、アブダクションの稼働を引き起こす行為である。Ⅱ章3項で検討したとおり、「～をする表現をする」企てでありながら「～をする」を帰結する実践である点は、アブダクションが本格的に成り立つ状況を理解しないかぎりには受け入れることが難しい。呪術を比喩としかみなせない

<sup>3</sup> この点はいずれ別稿で詳細に検討する予定である。

<sup>4</sup> ロビンスとラムジーが特集を組んだ *Anthropological Quarterly* の 81 巻 2 号の諸論文を参照されたい [Robbins and Rumsey 2008]。

ひとにとって、可視のものごとが不可視な領域と不可分に存立せざるをえない現実はずっと想像しがたいのであろう。ちょうどパプアニューギニアとマッサムの人々にとって、次のことが考えられないのと同様である。可視世界の法則性を信じること、内的・外的に観察できる自己だけを自己として設定すること、そして観察可能な対象にかぎって真偽を語り、観察不能な対象に関しては個々人の自由な見解に委ねてよしとすること。

どちらの現実がより強い根拠を有するかに答えるのは至難であるし、問う意味もさだかではない。ここでは近現代の科学技術が、不可視な領域を可視化する操作を中核として成り立っていることを指摘しておく。最後に、パプアニューギニアとマッサムにおける全体と部分の関係について、一言を付して覚え書きを終える。

「何でもあり得る」現実とは「別の何かであり得る」ことに対する執着と不可分である。可視なるものも不可視なるものも、人々にとってはその全体を見渡せないままに、「別の何か」をどこかに用意する状態で実在しつづけている。非-全体的なすべてが現前することは決してないが、だからといって全体性が否定されるわけではない。実在する対象としてテーマ化できるかぎり、確かにそれらは全体性をそなえる。不可視な諸霊や諸物、可視にしていまだに知られざるものを数えることはできないが、あるべき実在として確かに全体を構成している。

ここで強調したいのは、人々がそうした非-全体的な全体に対処するために、手持ちの要素だけをもって対処するという呪術の手法である。呪術はそうせざるをえなくて実践するわけではなく、そうすべきであるほどに「何でもあり得る」現実を呼び起こし、またその現実から効力を賦与されて当然のように作動する。そこでは部分集合と全体集合の間に対称性が成り立ち、部分集合を構成する元への操作が全体集合の元への操作として対応を成り立たせるのである。

不可視、未知という曖昧な規定のままに本来の集合論が成り立つはずがないことは、私自身が十分に承知している。けれどもあえてこの規定のままに元と集合の観念をもちだすのは、それによってパプアニューギニアとマッサムの人々による呪術が、さらには彼らの不断に変化をつづける現実がいつそうふさわしい姿で記述できるからにほかならない。

## 謝辞

本稿の議論は以下の発表をつうじて練り上げられてきた。「可視なるもの、不可視なるもの」(日本英文学会分科会「身体・人種・人間」代表・武田将明、2017年5月20日、静岡大学)、「みえるものとみえないもの」(ワークショップ「臨床と人文社会科学の架橋に向けて」代表・北中淳子、2017年11月23日、慶應大学)、「記号・論理・視覚」(エヴォカル研究会・一橋セミナー「進化と文化」代表・花淵馨也、2018年2月22日、一橋大学)、「不可知性の考察に向けて」(挑戦的萌芽研究「科学的・文化的実践のネットワークにおいて抽象的観念が果たす役割の解明」研究会、代表・久保明教、2018年3月3日、大阪大学)、「み

えるもの、みえないもの」(日本文化人類学会第52回研究大会、2018年6月2日、弘前大学)。すべてのお名前を列挙することはできないが、各発表で頂いた貴重なコメントと批判に対して、心より感謝を申し上げる。

## 参考文献

Anellis, Irving

2012 Peirce's Truth-Functional Analysis and the Origin of the Truth Table. *History and Philosophy of Logic* 33: 37–41.

ベイトソン、グレゴリー

1982 『精神と自然—生きた世界の認識論』佐藤良明訳、思索社。

Dipert, Randall

1995 Peirce's Underestimated Place in the History of Logic: A Response to Quine. In *Peirce and Contemporary Thought.*, Ketner, K. L. (ed.), pp. 32–58. New York: Fordham University Press.

Dugdale, Neil and Fergus Lowe

2000 Testing for Symmetry in the Conditional Discriminations of Language-Trained Chimpanzees. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior* 73: 5–22.

Greenwood, Susan

2009 *The Anthropology of Magic*. London: Bloomsbury.

春日 直樹

2016 「科学と文化をつなぐアナロジー」、『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』、春日直樹(編)、pp.1–16、東京大学出版会。

Kojima, Tetsuya

1984 Generalization between Productive Use and Receptive Discrimination of Names in an Artificial Visual Language by a Chimpanzee. *International Journal of Primatology* 5: 161–182.

中川 理

2011 「どうとでもありえる世界のための記述」、春日直樹(編)『現実批判の人類学』、pp.74–95頁、世界思想社。

Peirce, Charles Sanders

1960 *Collected Papers of Charles S. Peirce*. Charles Hartshorne and Paul Weiss (eds.) vol.1–2, Cambridge: Harvard University Press.

Robbins, Joel and Alan Rumsey

2008 Introduction: Cultural and Linguistic Anthropology and the Opacity of Other Minds. *Anthropological Quarterly* 81(2): 407–420.

Sidman, Murray and William Tailby

- 1982 Conditional discrimination vs. matching to sample: An expansion of the testing paradigm, *Journal of the Experimental Analysis of Behavior* (37): 5–22.

Stephen, Michele

- 1989 Dreaming and the Hidden Self: Mekeo Definitions of Consciousness, in *The Religious Imagination in New Guinea*. Herdt, G. and M.Stephen (eds.), pp. 160–186. New Brunswick: Rutgers University Press.

Strathern, Andrew and Marilyn Strathern

- 1971 *Self-Decoration in Mount Hagen*. London: Gerald Duckworth.

Takahashi, Tatsuji, Masahiro Nakano and Shuji Shinohara

- 2009 Cognitive Symmetry: Illogical but Rational Biases. *Symmetry: Culture and Science* 10 (10): 1–20.

トマセロ、マイケル

- 2006 『心とことばの起源を探る：文化と認知』大堀壽夫、中澤恒子、西村 義樹、本多啓訳、勁草書房。

- 2013 『ヒトはなぜ協力するのか』橋彌和秀訳、勁草書房。

友永 雅巳

- 2008 「チンパンジーにおける対称性の（不）成立」、*Cognitive Studies* 15(3): 347–357.